

大学院GP「現職教員の高度実践構想力開発プログラム」を通じた学校心理士養成 ～メンタリングによる研究支援を通して～

○後藤広太郎*・橋本道子**・跡部敏之**・植木克美*
坂野久美子**・川端愛子**・後藤 守*・三上勝夫**・庄井良信**
(*北海道教育大学大学院・**小樽市立稲穂小学校)

1. 本プログラムにおけるメンターの役割

本プログラムの特徴の一つとして、教育臨床実践メンター(以下メンター)の登用があげられる。本プログラムにおけるメンターの役割としては、定期的なメンタリング活動等により、現職教員院生の教育実践・研究支援を行うこと等が明記されている。ただ、本プログラムを遂行していく中で、現職教員院生のニーズに対応して柔軟に役割を遂行させていくことが求められる。

現職教員院生は、教育に関する経験・知識が豊富であり問題意識も明確であるが、研究経験が少ないことから、自らの問題意識を研究的手法に結び付けていく段階で困難を抱えることが多い。また、教師としての業務と並行して大学院に通学することから、院生同士による自由なディスカッションや、研究上の疑問や悩みを分かち合う時間が非常に少ない傾向にある。このような傾向は、「高度な実践構想力」が求められる学校心理士を養成する上での大きな課題の一つと言える。

上記の課題を克服するため、時には研究者として心理学研究に携わってきた経験を生かして適切なアドバイスを行い、時には同僚や先輩のような近い立場で現職教員院生のサポートを行っていくことが、メンターに求められる役割であると考えられる。

2. メンタリング活動内容

1) 定期的なメンタリング活動

「定期的なメンタリング活動」としては、個別メンタリングと出張メンタリングがある。以下にそれぞれの活動内容の概要を紹介する。

個別メンタリング

個々の院生が修士論文に取り組む中で生じた疑問や悩みに対応するためのメンタリング形態である。一人で研究活動・修士論文作成に取り組みがちな状況にある院生への総合的な支援が展開されている。個別メンタリングは、基本的に院生1名に対して担当教員、メンター、専門員等が参加して行われ、ほとんどの院生は継続的に個別メンタ

リングを受ける。よって、修士論文の進み具合や、院生の興味・関心を考慮した上で、院生一人一人に対応したサポートを行うことが出来る。また、研究内容に関して複数の視点から意見が交わされるため、多角的な視点で問題を考えていくことが可能となる。メンタリングの中で最もオーソドックスなスタイルであり、院生個々人にしっかり対応できるのが特徴と言える。

出張メンタリング

個別メンタリングに参加することが出来ないサテライト校に在籍する院生を対象に行われるメンタリング活動である。サテライトに在籍する院生の人数上、数人程度の小ゼミ形式を取って行われている。メンタリングに参加する院生のモチベーションも高く、参加者の間で一つのテーマについて活発なディスカッションを展開しやすいという特徴がある。現在、旭川サテライト3回、函館サテライト3回、釧路サテライト1回の出張メンタリングが行われており、今後も継続予定である。

2) 新しい形態のメンタリング活動

定期的なメンタリング活動と並行し、メンター企画勉強会、グループメンタリングといった、新しい形態のメンタリング活動が行われてきている。このような活動は、本プログラム遂行に伴って見えてきた院生のニーズを考慮してメンターが企画した活動であり、一般的なメンタリングの定義を越えた本プログラム独自のものと言える。

また、本来大学教員が行うことが定められている「勤務校訪問型スーパーヴァイズ」にもメンターが同行しており、メンタリングの新たな展開が期待されている。

以下にそれぞれの活動の概要を示す。

メンター企画勉強会

メンター企画勉強会は、メンターと院生間、あるいは院生同士で活発にディスカッションできる場を提供することを目的に、メンター2名が中心となって企画・実施している活動である。現在までの勉強会は、メンター自身の修士論文作成時の

経験談や、研究と実践はどうつながるのか、統計的分析の役割と実際に用いるうえでの問題点などが展開されている。メンター自身が修士論文作成時に困ったり悩んだりした点も交えて紹介しており、メンター企画勉強会を通して、修士論文のイメージを掴み、院生の修士論文に対するモチベーションを高める狙いがある。

グループメンタリング

今年度より新たに実施しているメンタリングスタイルである。ここでは、修士論文支援のみならず、院生各自が現在関心のある事柄について支援を試みる点がポイントである。6月現在において、2回実施されているが計11名が参加し、活発なディスカッションを展開している。参加者の中には本大学院修了生もあり、修士論文作成に関わる経験談や、修了生各自の職業に関する情報が、在学院生・大学教員・メンターに「現場の生の声」として提供されている。毎月1回実施されており、院生は実施されている時間の中で、自身の都合に合わせて自由な時間に参加して良いという、柔軟なスタイルを採用している点が特徴である。

勤務校訪問型スーパーヴァイズへの参加

本プログラムでは、「大学教員が“勤務校訪問型スーパーヴァイズ”を行い、実践における研究主題の掘り起こしと研究の遂行を支援する」ことが盛り込まれているが、この勤務校訪問型スーパーヴァイズにもメンターが参加している。メンタリング活動や勉強会等は、すべて研究現場たる大学において行われているものであるが、勤務校訪問型スーパーヴァイズは、実践現場、すなわち現職教員院生のホームグラウンドにおいて行われる点に特徴がある。

実際に院生が勤務する教育現場に赴き、教師としての院生の仕事に接することにより、院生の興味関心の源をより深く理解出来るという利点がある。一方、研究に足場を置くメンター自身にとっても、勤務校訪問型スーパーヴァイズは教育現場の実際の姿を体感できる貴重な場になっている。

3. メンタリング活動の院生への影響

メンタリング活動が院生に対しどのような影響を及ぼしているのかに関して検証することは困難であるが、効果を検証するうえでの資料のひとつとして「メンター企画勉強会」でのアンケート調査の結果を紹介していく。

修士論文作成については、「思わず聴き込んでしまうような語りかけが良かった。」「失敗談も含めて、とてもためになった。」「悩みどころを勉強会という形で解消してもらい、院生としては大変助かると思う」といった、より院生に近い立場でサポートを行うメンターの役割の特徴を反映した感想が得られた。

また、「どのような問題意識から、どういう風に発展させていくのかということが、具体例があったのでわかりやすかった。」「科学的に、客観的にということに慣れていないので大変参考になった。」「実験での修論はあまり考えていなかったが、明確な形で結果が出るという楽しさがあることを学べた。」「統計は最初からダメだと思っていたが興味湧いてきた、統計の本を一冊買って帰る。」「とっつきにくい統計でしたが、少し本を手にとってみる勇気が湧いてきた。」等、修士論文に対する院生のモチベーションを高める効果があったことも推測されている。

4. メンタリング活動が学校心理士養成に及ぼす影響

メンター企画勉強会参加の感想からは、今後修士論文に対して前向きに取り組もうとする姿勢がうかがえた。更に、“客観的な視点”や“統計的な視点”といった、これまで馴染みのない研究的な視点を取り入れていこうとする意欲も見られた。また、メンタリング活動は、メンターから院生への一方向的な支援体制というだけでなく、メンターにとっても現職教員院生の教育実践的な視点を学ぶ場になっている。

このように、心理学研究に携わってきたメンターと教育現場に足場をおく現職教員院生が、メンタリングを行う中でお互いの知識・考えを持ち寄ってディスカッションを行うことにより、これまでになかった新たな視点から学校現場で生じている問題を考えていく力を養うことが期待できるのではないだろうか。また、新たな視点の獲得は視野の広がりを促すものと考えられ、「関連機関との連携」についてもより円滑に実践できるものと思われる。

今後、メンター企画勉強会以外のメンタリング活動についても効果の検証を進め、より良いプログラムを模索していきたい。